

アニメで知る心の世界 9月

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品： 竜とそばかすの姫

あらすじ

高知の自然豊かな村に暮らす、すずは両親の愛情を一心に受け、天真爛漫に育っていった。その中で彼女が見つけた音楽アプリ。それに彼女は強い関心を持ち、母に見守られながら様々な音楽を作っていった。しかしその幸せは長くは続かず、幼少期に水難事故で母を亡くしてしまう。そのことに加え、ネットで事故時の母の行動が炎上する。音楽を作り、母と一緒に歌うことが何よりも大好きだったすずは、それらのことを機に歌うことができなくなり、心を閉ざし、学校でもほとんど交流せず、唯一の家族である父ともコミュニケーションは最低限となり、溝が生じていた。そんなある日、親友の紹介でインターネット空間上の仮想世界「U」に参加し、そこでの交流と現実での交流の行き来をするなかで彼女の高校生活が徐々に彩りをもっていく。

この作品は喪失に伴う心の危機と再生、そして思春期の人々が抱く心の揺れ動きを瑞々しく描いた作品となっている。

今回のテーマ

- I. すずは何故歌えなくなってしまったのか？
- II. すずにとって『U』とはどのような存在であるか？
- III. 竜はすずにとってどのような存在であるのか？
- IV. 『U』のなかでアンベイルすることの意味は？

I. すずは何故歌えなくなってしまったのか？

1. すずの現況について考えていく

すず／内藤鈴：高知県の仁淀川という清流付近にある集落の片隅に暮らす高校生。

→思春期から青年期に至る年代。

思春期になると、心身の成長の中で、主体性が立ち上がり、学童期まで抑え込んできたエディプス葛藤が再び持ち上がり、子どもは自分自身のアイデンティティが揺らぎ、その中でいくつもの課題を抱え、喪失・選択・幻滅・独立といった情緒的葛藤を重ねながら（それが Adolescence Process）乗り越え、一人前の大人に成長していく。

しかし、すずは、ルカちゃん、カミシン、しのぶくんたちのように活躍している同級生たちを遠目で眺めており、『月の裏側（ヒロちゃん評）』のようにひっそりと高校生活を送っており、なにか殻に閉じこもるかのよう、そういう情緒的葛藤から距離をとっているように感じられる。それは、すずがエディプス葛藤から回避し、傷つかないように、自己愛的な殻に閉じこもっているようにも感じられる。

それは彼女が、母の死という喪失をなかなか受け入れられないためにそのようなことが起きているように考えられる。

2. 母の死は、すずにどのような影響を与えたのか？

すずが幼い頃、母は氾濫した川の中洲に取り残された少女を助けた際、水難事故に遭い、亡くなってしまう。

悲哀の心理過程（喪の作業）【J.ボウルビィ】

①無感覚・情緒的危機の段階（激しくショックをうけている）

②思慕と探求・怒りと否認の段階

（対象喪失を認めず、失った対象が存在するように振る舞う）

③断念と絶望の段階（激しい失意、抑うつ的体験）

④離脱・再建の段階（喪失を受け入れ、立ち直り始める）

ー母さんは、なぜ私を置いて川にはいったのか？なぜ私と生きるよりも、名前の知らないその子を助けることを選んだのか？なぜ私は一人ぼっちなのか？なぜ、なぜ、なぜー。

すずが上記の言葉を高校生になった今も発しており、そして上記のような思いを何度も何度も書き殴っては捨てているということを繰り返しているように、母が亡くなったこと受け入れられず、今も②と③の間を行き来し続けているように感じられる。それゆえに Adolescence Process に伴う喪失・選択・幻滅・独立を受け入れられず、主体的になれず、殻に閉じこもるような生活を送っているように感じられる。 cf「若おかみは小学生」のおっこ

そして、ネットのたくさんの書き込みにこめられた無意識の悪意に、すずは苦しめられ続ける。

→ネットの書き込みは悪い対象。そこ（周囲の人々）から自分を守るように（良い対象に包まれるように）、自身と周囲を分割さえるように殻に閉じこもっている。（妄想分裂ポジション）

②の思慕の探求が強いが故に、様々な母の思い出が強く想起され、そこにまつわる様々な思い出に伴う色々な感情を湧き起こってはなかったことのようにしている、けれどもその感情を誰とも共有できず、高校生活は大人しい感じだが、心の中には色々な情緒が煮えたぐり、苦しんでいるように感じられる。

3. すずは何故歌えなくなってしまったのか？

母との思い出にスマホの鍵盤タブレットで夢中になっていじり、色々な曲を作り、母と歌っていた回想場面があったが、それだけすずにとって歌うということとは母の思い出を想起させられることである。それ故に歌うことで整理できていない色々な情緒が込み上げてきて、それを押し込めるように歌えなくなっているように感じられる。

また歌うということは自分を表現する＝主体性の確立という象徴的側面もあり、それが怖くてできないが故に歌えなくなっているように感じられる。

そのためにカラオケボックスで周囲からマイクを向けられたとき（ここもネットの悪意のある書き込みのように悪い対象のように描かれている。）すずは叫んだと考えられる。

一方で、彼女自身、クラスで盛り上がっている中にも入りたい思いもあり、ここに入れない自分に忸怩たる思いを抱き、沈下橋の真ん中で歌おうとするが、歌にならず、すずは嘔吐してしまい、橋の上に倒れてしまう。

思春期の女性で、同年代の人々に関わることに強い不安を感じている方の中で嘔吐恐怖に悩んでいる方は割合として非常に多い。そしてその方々の話を伺っていると、様々な陰性感情を表出する（吐き出す）ことを非常に怯えているようにも感じられる。すずもおそらく同じような心理状態であったと考えられる。その中で、彼女が吐いてしまったということは、彼女自身、今の状況をどうにか脱したいと考えており、強い苦悩のなかでもがき、そして吐いてしまった自分に対して惨めで情けない感情を抱いていたように感じられる。

そこで、ヒロちゃんから『U』の招待を受ける。

Ⅱ. すずにとって『U』とはどのような存在であるか？

1. 『U』とは？

『U』とはもうひとつの現実

「As」はもうひとりのあなた

現実はやり直せない

でも『U』ならやり直せる

→『U』は内的世界と外的現実を結びつける空間のように感じられる。

→それは Winnicott のいう潜在空間のようにも感じられる。

2. 潜在空間とは？

赤ん坊と母親、子どもと家族、個人と社会あるいは世界の間。

そこで個人は創造的に生きることを体験し、個人にとって神聖な場とみなす

(Winnicott)

→母に見守られながら、思うがままに子に対象を発見し、その対象を思うがまま

に使い、遊びを許容する空間 （「クラインとウィニコット」P78 参照）

その様がこのアニメで、すずの幼い頃の母との思い出に鮮やかに描かれている。

それは、幼い頃のすずが、母のスマホをいじる中で音楽制作の為の鍵盤のアプリを見つけ、それをいじるようになり、すずはそれに夢中になり、必死に音楽を作り、それを母に聞かせ、それを母が微笑ましく見守るという幸福な空間が描かれたシーン。

すずは鍵盤アプリという対象を発見し、それを自分のものとして、使い、母に見守られながら、遊び、徐々に外的現実に触れていこうとしていった。つまり母のスマホが、すずにとっての移行対象であり、母に見守られながら、すずは夢中になって遊び、音楽を作るという創造的な体験をしたその空間こそが潜在空間と考えられる。

しかしその潜在空間は母の突然の死で、なくなってしまった。

『U』はデジタル技術が得意なヒロちゃんに見守られながら、すずが歌に没頭できる（主体性が確立できる良いようにする）潜在空間であると考えられる。つまり、母の死で失ってしまった、すずの潜在空間のやり直しをヒロちゃんが提供したと考えられる。

3. 『U』の中でのすずはどのように振る舞ったのか？

すずは現実では、『月の裏側』ひっそりとした高校生活を送っていた。それは、主体的に生活しているとは言い難く、すずにとって不本意であると考えられる。だからこそヒロちゃんの『U』の招待を戸惑いながらも受け入れたのだと考えられる。

このことは、主体性を確立したいという思いであり、自分がヒロインになって自分の人生を進めていきたいという思いでもあるように感じられる。

だからこそ学校中の人気者であり、学校の姫ともいわれるルカちゃん（学校のヒロイン）そっくりの As を拒みながらも選択し、ベル（Bell、美女と野獣のヒロイン：Belle）という名前にしたと考えられる。

そのなかで、現実世界のすずは歌えることができなかったが、『U』の世界で、ベルになることで歌うことができた。そして初めは誰も見向きもせず、全く評価されていなかった彼女の歌声は瞬く間に高評価をうけるようになっていく。

当初すずは、多様な評価の中で、戸惑い、彼女を叩く評価ばかり気にしてしまうが、ヒロちゃんの『『U』じゃ嘘のない賛否両論が本物を鍛えあげるんだよ。』

と言い、すずが評価された秘密に対して『『U』のボディシェアリング技術は、その人の隠された能力を無理やり引っ張り出す。』』と言ったようにすずの才能をヒロちゃんを見抜きプロデュースしたとも考えられる。

つまり、ヒロちゃんはすずに親身に寄り添い、彼女に伸び伸びと活動できる（主体的になれる）場を提供したと考えられる。そのことがベルの才能を開花させ、周りから Bell から Belle（フランス語で「美しい」の意味）に評価される。

つまりベルを『U』のなかのヒロインとして周りが認識したと考えられる。

またすずはこれまで悪意の書き込みに苦しめられ、そのことがより彼女の自信を喪失させ、自身の殻に閉じこもってきたが、悪い評価が良い評価を凌駕していく中で、すずの自己肯定感が高まっていくように感じられる。

4. 『U』を通じてすずはどのように変わっていったのか？

『U』でのベルの評価が鰻登りに上がっていく中で、すずはある出来事に遭遇する。それは密かに思いを寄せていた、幼馴染のしのぶ君から学校で声をかけられたことである。

しのぶ「何かあった？」

すず「……ないよ！」

しのぶ「あったでしょ」

すず「ないって」

(略) そのやりとりがしばらくすずとしのぶの間で行われる。

しのぶ「言ってみ？」

この光景は 6 歳の時に泣き続けるすずにしのぶ君が「なに泣いてんの？」と声をかけたのちに「言ってみ？」言われた思い出と重なる。

(この関わりはすずと父との関わりに似ている。)

そして周りの視線を感じ、女子がザワザワしているのをみて、足早に去り、廊下の角に隠れるすず。

すず「しのぶ君。私、もう小学校の時の私とは違う。いつまでも心配されている
ばかりの子じゃないから。ないから……。」

ちゃんと伝えようと思って決意して戻ると、しのぶくんはルカちゃんと楽しく
話しており、すずは立ち去る。

【考察】

『U』の中で幼少の頃から夢見ていた、自分で音楽を作って、歌うことができ、
それが周りから強く評価されることで、現実世界で主体性を確立していこうと
思い始めたのだと考えられる。その中ですずは、恋焦がれるしのぶ君に対して、
優しく守られる存在ではなく、対等な存在になりたいと感じ始めたのだと思う。
それはすず自身の心が成熟し、主体的になって大人の世界に入っていきたいと
思うようになった兆しと考えられる。しかしルカちゃんとしのぶ君が話してい
る光景を見た時に自分はその中に入れないと思い、静かに立ち去ってしまう。
ルカちゃんはすずにとって憧れの存在であると同時に叶わない対象。そしてす
ず、しのぶ君、ルカちゃんという三者の関係性のなかですずはエディプス葛藤を
強く感じ、そこにはまだ自分はいれないと距離をおき、踵を返してしまう。

→そこに向き合うには心の成熟が必要不可欠。

→母の死を受け入れられないことによって止まっていた Adolescence Process を進めていくこと

→喪失を受け入れ、妄想分裂ポジションの心性から抑うつポジションの心性に移行させていくこと。

→そして『U』にてベルのコンサートに竜が出現してくる（悪い対象）

Ⅲ. 竜はすずにとってどのような存在であったのか？

前提として、このアニメはディズニーアニメ「美女と野獣」がモチーフとなつて作られた作品である。「美女と野獣」のお話は、次のようなものである。

魔女の魔法によって、あるお城に暮らす王子は野獣に変えられてしまう。王子にかけられた呪いを解くには、王子が人を愛し愛される「真実の愛」を探すことである。

その中で王子はベル（Belle）と出会い、お互いに愛し愛されることで、王子にかけられた呪いが解かれ、二人は末長く幸せに暮らす。

ここで、野獣とは悪い対象であり、王子自身が今まで受け入れられなかった醜い部分であり、それをヒロインであるベルに受け止められ、ベルの優しさに気づき、その中で自身の醜さを受け入れ、人間らしい心(思いやりの心)を取り戻す。それは野獣にとって妄想分裂ポジションから抑うつポジションの移行である。そしてこの物語は Adolescence Process の情緒的混乱をある女性の出会いをきっかけに成熟し、一人の大人になった男性として女性と結ばれる物語と言っても過言ではない。「美女と野獣」では主に野獣側つまり男性側の視点が描かれているが、「竜とそばかすの姫」はヒロイン側に焦点を当て、ヒロインが如何に傷ついた対象を受け入れていくようになるか?という過程が描かれているように感じられる。それは「若おかみは小学生 劇場版」の喪失を受け入れられず、傷付いた心で花の湯旅館にやってきたおきちゃんさん達をどう、主人公のおっこが受け入れていくかということに似ているように感じられる。

1. 竜とは？

『U』の世界でモンスター型 As。黒い竜のような獣の姿をしている。

背中に複数の痣があり、暴力的で『U』の世界に存在する武道場に乱入しては「道

場破り」を繰り返し、As 達から忌み嫌われている。

その存在がベルのコンサート会場に乱入し、ジャスティス軍団に追い回され、ライブを台無しにし、その場の As 達は皆ブーイングをする。

しかしベルはその存在に怯えながらも、非常に気になってしまう。そして竜という人物が実際どんな人物なのかの詮索が始まるが、その多くがネット上では華やかな生活をしているように見せかけているが実際は孤独でひとりぼっちで、そんな本当の自分に触れられないように攻撃性が強いことが見えてくる。

→その存在こそ、すず自身が距離を置き、分割して、否認してきた自身の情緒であり、すずは、ここでそこに向き合おうをし始めているように感じられる。

「傷つけられる……。竜の背のあざ……。もしかしたら……。」

すずはその竜の姿になにか惹きつけられる。ある種の自身の傷ついた心の投影である。そして竜に強い関心を持ち、竜のお城へと入っていく。

2. 竜と出会うこと、そして現実でおきたこと

1) はじめての竜との関わり～現実での出来事

竜のお城に導かれるように入っていったベル。

そこで竜に出会うが、ベル（すずの As）に対し、竜は恫喝する。しかしそこに動じながらも怯まず、竜を知ろうとする。そして竜が天使 As に対して優しく包み込み、その繊細な思いやりを感じ、ベルは「あなたの、本当の姿は、どっち」と尋ねる。

しかし竜は何も答えず去っていく。その一連の出来事に、現実の世界ですずは物想いに耽る。（「すずが恋してる。それも、悪そうな男に」）そしてアドバイスに従い歌を作ってみようとする。

【考察】

この過程は竜が投げ込む β 要素（心に消化できないモノ）をベルが受け止め、ベルは困惑しながらも考え、物想いに耽り、受け止めそして返そうとする（ α 機能、 α 要素）過程とも考えられる。cf 「若おかみは小学生」

それはベル＝すず自身が自身の色々な未消化な情緒に関心を持ち、学校内でしのぶ君との有らぬ噂を立てられ、それを必死にかき消そうとするように、もがきながらも現実世界に徐々に主体的に関わっていこうとしているように感じられる。

そして現実の世界ですずはルカちゃんからメールのメールを受ける。その内容は好きな人のことで話を聞いてほしいという内容であった。その後、しのぶ君に会っても「こんな私のことなんか、もう気にしなくていいんだよ。」といい、（この背景にはしのぶ君と対等な関係になりたいという思いもあるように感じられる。）自分の思いを打ち明けられない、一方でルカちゃんに「応援しているから」（ルカちゃんのようにいつも明るく前向きでいたい憧れ）というメールを送り、すずは「私、どうしたいんだろう」と言ってボロボロと泣き出す。

主体的に関わることは、これまで回避してきたエディプス葛藤に向き合うということ。しかしそのその中に入っていくことで、これまで抑え込んできた、憧れや嫉妬に伴う様々な情緒が溢れ出て、そんな自分にすずは驚き、混乱しているように感じられる。

2) 竜の前で歌うこと

竜は以前と同じようにベルに対して拒絶した態度をとるが、ベルがジャスティン達に取り囲まれ尋問され、脅されるところに竜は助けにくる。ベルはその優しさに触れ、自分が作った歌を竜の前で歌う。

一人にして欲しいと あなたは突き放すけれど

本当は胸の中にあるものを 覗かれたくないのでしょう

怒り 恐れ 悲しみ

抱えきれぬ夜

でも口にできない

聞かせて 隠そうとするあなたの声を

見せて 隠してしまうあなたの心を

その歌に徐々に竜は心を開き、ベルと一緒に踊り、楽しいひと時を送るが、割れる物音と共に、その和やかな雰囲気は一変してしまい、竜は苦悩し、ベルは何もできず、途方に暮れてしまう。

【考察】

この歌はベルが竜への想いの歌を綴った歌だが、一方で、自分自身がどうしたらいいのか解らない、その感情を素直に綴った歌のようにも感じられる。そしてそれはルカちゃんやしのぶ君といった憧れであるが、彼らには敵わないエディプス葛藤にまつわる情緒であり、そこに向き合おうとする（ルカちゃんや、しのぶ君と対等に関わりたい）が、なかなか素直にできない苦しさを歌っているようにも感じられる。

→そしてルカちゃんとの関わりが始まる

3) ルカちゃんとの対話

ルカちゃんがすずに会いに来て、彼女はすずに好きな人に上手く告白できなかった話をする。

ルカ「ううん。言われても仕方ないの。私が全然自信がないのが悪いんだし、実際キモいし……。」

そこですずは必死にフォローしようとして思わず

「しのぶ君ひどい！」と口走ってしまう。実際ルカちゃんが好きなのはカミシンなのだが。

そして二人はすずの自宅で語り合う。そこですずは 6 歳の頃にしのぶ君に『僕が守ってあげる』と言われ、プロポーズされたと思っていたエピソードを話し、ルカちゃんはしのぶ君のことを「お母さんみたい」という。

【考察】

『U』の中ですずの As であるベルが竜と情緒的交流をすることで、現実の世界のなかですずは徐々に自身に向き合い、エディプス葛藤に向き合おうとする。その中でルカちゃんに会い、ここでルカちゃんが完全無欠のヒロインではなく、彼女もすずと同様にコンプレックスを抱えた一人の女性であることを知る。それはすず自身が、抑うつポジションを受け入れつつあり、成熟したからこそ知ることができたと感じられる。

なぜなら、もし成熟できておらず、殻に閉じこもったままであれば、そこまでルカちゃんがしんみりした感じで、すずに語ることもなかったし、もし語ったとしてもすずはその言葉を真意と受け入れられず、「(ヒロインである) ルカちゃんがそんなこと思うわけない」と感じたのではないだろうか？つまり同じ立場の人であると受け入れられなかったのではないだろうか？

その後、ルカちゃんはカミシンに思いをつげて、受け入れられ、付き合うことになる。

4) ジャスティンとは？

ジャスティンは『U』の正義と秩序を守ると主張し、その世界を脅かす竜を追っている。

多数の企業とスポンサー契約しており、As を強制的にアンベイルする効果がある緑色の石を持っている。

「引き締まった筋肉の堂々たる体躯は強さと勇ましさを思わせ、それを包むバトルスーツは、高潔な人格を想像させた。まさにヒーロー、英雄、偉丈夫、正義の味方、救世主に呼ぶに相応しい (小説版)」

ジャスティンはすずのとしての超自我的側面であるように感じられる。すずはこれまで、自身の強い超自我に支配され、ある種その強固な枠を自分で作り出し、窮屈な生活を送ってきたと考えられる。

超自我とは？

自我を観察し、命令を与え、裁き、処罰によって脅かす存在。肛門期からエディプス期にかけて形成されていく。

ジャスティンが竜を捉え、竜の城を崩壊させたように、これまでのすずは自身の強い超自我により、自身の中にある孤独感や怒り、そして寂しいという情緒を悪い内的対象と捉え、そういったものを撲滅させようとしてきたように感じられる。

しかしベルがジャスティンの尋問に対して竜の住処を教えることを拒絶したようにすずは、これまでの強烈な超自我の在り方に疑義を感じ、すずの自我がその超自我に対して抵抗しているように感じられる。ある種、内的な世界での反抗期のようにも感じられる。

5) 自分を『U』のなかでアンベイルすること

すずは、『U』のなかでベルとして振る舞い、歌姫として周囲から評価されるなかで、徐々に自信を取り戻し、「月の裏側」のような存在だった彼女が、「お日様のように皆が集まってくる」とうてい近づけない対象と考えていたルカちゃんと対等に扱われるようになる。

一方でしのぶ君に『U』の中のベルとすずが同一であるということを見抜かれてしまい、すずは非常に動揺してし、しのぶ君がいる場から立ち去り、泣き崩れてしまう。

ここですずとしのぶ君の対話入れる

【考察】

『U』の中でベルとして振る舞うことは、ある意味、すずが幼少期に鍵盤アプリという対象を発見し、それを自分のものとして、使い、母に見守られながら、音楽を作り、歌い、遊び、徐々に外的現実に触れていこうとする様であった。そこから徐々に外的現実にはすずは触れていったのだが、自身の幼児性を現実の自

分が同じパーソナリティであるということをまだ受け入れられないままであったと考えられる。そこをしのぶ君に直面化され、すずは混乱し、取り乱したものと考えられる。

しかし『U』の中で竜の城がジャスティン達によって焼き払われ、現実の As として竜を探し求める中で、しのぶ君の強い促しから、すずは現実の世界では苦悩する。

ここでしのぶ君の歌を促すシーンをいれる

【考察】

竜の存在こそ、すず自身が距離を置き、分割して、否認してきた自身の情緒であり、これまで悪い内的対象と捉えてきたものである。

すずが大人になり、成熟するということは竜の存在をなくすことではなく、竜の存在、つまり自分の否認してきた悪い内的対象も自身であり、それも自分の一つなのだということを受け入れることである。そしてそのことをすずは

理解していた。だからこそ『U』の中の竜、現実世界では恵くんが虐待されている様を見て、すずはその現場を見ている誰よりも強くどうにかしたいと感じたのではないだろうか？

しのぶ君は『U』のなかですずとして歌うことがすずにとって大切であるということを伝え、やや強引に歌わせた。自分の本当の姿を見せないと恵くんには受け入れてもらえない、偽りのない生身同士の関わりでないと受け入れてもらえないということであるが、そのことに加えて、同じ自分なのだとということを受け入れることは一人の大人になるには大切なことなんだと伝えているようにも感じられる。

ここでしのぶ君の役割は母親的立場から父親的立場へとかわっている。それはある意味、すずにとってエディプス対象にかわっていったとも捉えられる。そしてそのことから、すずが距離を置いていた父との交流が始まったようにも感じられる。

→そしてすずは『U』の中でアンベイルされることを決意する。

6)『U』のなかで歌うということ

『U』の中ですずは歌い出す。

きらめきの花 夢の宝石

世界は美しい

臆病と不安 縛られるけれども

強く優しく なれたら

あの空は 戻らない

ひとりでは 生きられない

あいたい もう一度

胸の奥 ふるえてる

ここにいるよ とどいて

はなればなれの 君へ

目を閉じた 時だけ

会えるなんて 信じられない

あいたい

はなればなれの 君へ

【考察】

この歌詞は As としての竜に向けて歌った歌であるが、亡くなってしまった母の思慕の念を綴った歌詞のようにも感じられる。そしてすす自身が一人の女性と成熟し、母のように他者を受け入れようとする決意にも感じられる。

すすがこの歌を歌う中で、幼い頃に中洲に残された子が「助けて」と泣き叫び、周囲の大人達は誰も手出しできず、狼狽している中で、母は覚悟を決め、懇願するすすを振り切り、「だめだよ。行かなきゃあの子が死んじゃう。」と言っ

て、ライフジャケットを着て、その子を助けたことを思い出し、すずはハッとす
る。

母を失ったことは非常に悲しい思いだったかもしれない。一方で自分も川に
入って行こうとすることを引き止めたしのぶ君やこれまですずを陰ながら見守
ってきた周囲への感謝、そして母の偉大さを感じ始めているように感じている。
これはまさに抑うつポジションへの移行である。

これまですずは『母さんは、なぜ私を置いて川にはいったのか？なぜ私と生き
るよりも、名前の知らないその子を助けることを選んだのか？なぜ私は一人ぼ
っちなのか？なぜ、なぜ、なぜ』と問いかけていたが、それはある意味、亡くな
った母を悪い対象と捉えてきたように感じられる。松木は妄想分裂ポジション
にあるときは良い対象が亡くなったのではなく、悪い対象に苦しめられている
という体験をすると言っている。まさにすずはこれまで、母の喪失を受け入れら
れず、妄想分裂ポジションのなかでのたうちまわっていたように感じられる。

『U』の中で評価され、竜という存在を受け入れる中で、すずは徐々に周囲に愛
されてきたことを理解し、すずの心が妄想分裂ポジションから抑うつポジシ
ョンへと移行していった。その移行は愛と憎しみの葛藤であり、自身のもつ愛の中

にいかに憎しみを収めるかということが大切になってくる。

小説版には次のように書かれている

私は、美女でもなんでもない。ただの田舎に住むそばかすだらけの少女でしかない。

だけど私の中には、ベルがいる。

もうひとりのわたしが、私を、強くしてくれたのだ。ベルは消えてしまったが、私の芯として、いまでも私の中にあり続ける。

ありがとう。

まさにこの心の変化こそが、すずが抑うつポジションを通じて、一人の大人として成熟していく姿を描いていると考える。

そしてそのことが次の展開である、恵くんに会いに行くということにつながる。

7) 恵くんに関いにいくこと

『U』でベルをアンベイルし、すずのありのままの姿をみせ、『U』では竜の姿であった恵くんに関がベルであることを認められ、再び二人はネットを通じてつながる。しかしその画面に恵くんの父親が現れ、恵くんと知くんに暴力をふるう。その場所がどうにか判明するも、誰も彼らにできる術がなく、狼狽しているなかで、すずは駆け出し、恵くんのいる元へと向かっていく。

まさにこれは幼い頃に中洲に残された子をすずの母親が川に入って行こうとするシーンと重なる。

すずが抑うつポジションに移行し、一人の成熟した大人になるなかで、主体的になり、母と同じような行動をとったと考えられる。

夜行バスで SNS 上での父とのやりとりいれる

すずは恵くんの住む街にいき、実際の彼らに出会い、抱きしめる。そして恵くんの父親が怒った様子で出て、恵くんをすずから引き裂こうとする。

そこに覚悟を決めて、すずは立ち上がり、父親に対峙する。父親は拳を構えて威嚇するが、みじろぎもしないすずの姿に動揺し、逃げ出すように戻っていく。

このシーンは色々賛否両論分かれるシーンであるが、すずが恵くんの父親に対峙するなかで、すずは主体性を持った大人の女性である一方で、恵くんの父は彼の子供達を仲良くやっているという姿は偽りの姿で、すずによって、ある意味アンベイルされ、「大人でも親でもないただの弱々しい哀れな男」であるということが露呈され、彼はそれが受け入れられず、逃げ出してしまったと感じられる。そのことに恵くんはハッとして

「僕も立ち向かわなきゃいけないって思った。だから闘うよ。」

と言った。そして知くんは

「ベル、キミは、キレイ」

このシーンはなにか「君の名は。」と町長である父と主人公の宮水三葉が対峙するシーンと非常に重なる。

8) 恵くんとの出会いの後、すずはどう変わったのか？

①恵くんとの出会いの後、帰り際、自宅近くの駅である伊野駅のホームに降りた時に父が迎えに来ている。

父「……今日、ごはんは？」

すず「……食べる」

父「じゃ、たたき、食おう」

【考察】

小説版ではこのやり取りの後に

たったこれだけのやりとりをするのに、一体、何ヶ月、何年の時間を費やしたのだろうか。でもいいんだ。やっと言えた。

と書かれている。

これはすずが自身が思春期の中でエディプス葛藤を経て、父という存在を受け入れたとシーンと考えられる。そして父が作ったご飯をこれまでは「いらない」といって拒んできたすずだが、それを「食べる」と言ったこと、つまり父を

受け入れた象徴のようにも感じられる。

すずは恵君との関わりがあるまで、エディプス葛藤から距離を取るように父から避けてきたが、視聴者側から見ると父は非常に温厚に見えるが、もしかしたらすずの内的世界では、父を恵君の父のように非常に怖い対象（自分を脅かす悪い対象：つまり自身の悪い内的対象の投影でもある）と捉え、怯え、距離をとり、また、それがすず自身の強烈な超自我となり、彼女自身苛まれてきたのかもしれない。しかし恵君の父と対峙することで、すず自身の超自我は穏やかなものに変わり、現実世界を伸び伸びと受け入れられるようになったようにも考えられる。

②その後、皆と一緒に河原沿いを歩くシーンでしのぶ君に言われたシーン

「あの子たちを守るすずを見て、なかなかやるなと思った」

「かっこよかったぜ」

「ああ、やっと解放された。 もう守るんじゃなくて、これから普通に付き合える気がする。昔からそうだったんだ」

しのぶ君のこのセリフは上記の考察の通りにすずが、恵君との出会いを通じて自身のエディプス葛藤に向き合い、成熟し、しのぶ君と対等な立場で関われるようになった言っているように感じられる。

そしてそれが青春の群像を爽やかに瑞々しく描いた作品となっている。